

おおひとものがたり

あおりけんいわきむらはだふく

はなし

「巨人物語」

青森県岩木村幡副のお話

むかしむかし あかくらやま きよじん す

昔々、赤倉山に巨人が住んでいるといううわさがありました

たに ふか だれ い

たが、谷が深くて、誰も行ってみたものがありません。

はだふく お さじゅう

岩木村幡副に小山重という鍛冶屋がありました。

ひ はやくしごと おわってね

ある日、早く仕事を終って寝ていますと、真夜中にドンドンと

ど でし で

くぐり戸をたたくものがあります。弟子が出てみると、

てつ ぼう ちゅうもん

「赤倉がら鉄の棒を注文ネ あがれた。八日までネ だが

ようか

してけ」

い おやかた

と言うのです。親方にききに行くと、これはただごとでないと思っ

おもっ

たがことわりかねて、

ひきう

「引受けます」

へんじ

つかい かえ

と返事をさせて、使を帰しました。

つぎ ひ

そして次の日から、注文の鉄の棒をつくり始めました。

なが いっけん おも ろくじゅっかん

きた

長さが一間、重さが六十貫という鉄の棒を鍛えるのですから

たい

なのか

つく あ

大へんです。それでも、弟子と七日がかりで作り上げました。

やくそく
約束の八日の日には朝早く弟子三人にせおわせて、赤倉沢の
どうも
お堂まで持たせてやりました。

やまおく
三人は山奥に入って行くと、茂みの中にお堂があったので、そ
すわま
こに坐って待っていました。

ひぐ
しかし日暮れになっても受取人が来ません。あたりが真暗に
ころ
なつた頃、やっとノソリと一人の男が現れました。

めとど
「お前たち、よく届けでくれたナ、重くてあたべ。今甘エもの
か
食へら」

はい
と言って茂みに入りました。やがて又その男が姿を現わして、
ひくし
火をおこし、串にさして何か焼いていました。

せ
背がおそろしく高く、顔にもすねにも、ひげがばらばら生え
さかな
ているようでした。男は三人に魚をたべさせました。

あと
三人はその後しばらく眠っていました。

よなか
夜中に一人が眼をさますと、自分の側にチャリンと音がきこえ
あさ
ました。朝になって気がつくど鉄の棒がなくなつて、その場所にと
ちようもくむかし
くさんの鳥目（昔のお金）がありました。

三人がお堂の方をみると、山の茂みがふみつけられて、ふみつけ道みちができ、お堂のなげしには、二尺もある大わらじおおがぶらんぶらんとさがっていました。

三人はびっくりして顔かおを見合みあわせました。

三人は鳥目には目もくれず、山道やまみちを走るようにして幡副はだふくに帰りました。

銀治屋では帰りを待っていました。親方は三人に、色々いろいろたずねましたが何も答こたえません。ただ、

「あの鉄の棒は、たしかに大男ネ わだして来た」
と言いいます。

むら ひとびと
村の人々も、

「あれは、赤倉の巨人おおひとが注文した、鉄の棒でねべが」
と、うわさしました。

注・赤字のカッコ内の文は、声に出して読みません。